

茅風



Breeze from the field of thatch-grass

2014年5月27日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信42号



3年ぶりに実施された上ノ原の野焼き

- 1月～4月の活動報告(事務局)1
- 第13回定期総会開催報告(事務局)2
 - ◆新年度執行態勢
 - ◆2014年度の主な活動計画・日程
 - ◆会員制度の改定
 - ◇継続は力
 - 2代目塾長就任にあたって(塾長 草野洋) ... 3
 - ◇塾頭就任挨拶(塾頭 北山郁人)3
 - ◇セミナー報告(西村大志)3
 - 利根川の生き物を守る「人とのかわり」 by西廣淳准教授
- ◆東京楽習会開催報告(稲貴夫).....4
 - 小貝川の野焼きを体験する—
- 一般参加歓迎プログラム参加者レポート5
 - 雪中散策・キャンドルナイト編—
 - ◆松田そら ◆多屋全子 ◆斎藤寿子 ◆島貫倫子
- 一般参加歓迎プログラム参加者レポート.....7
 - 春の風物詩「茅場の野焼き編—
 - ◆草野洋 ◆井本大貴 ◆南野ショナー
- 藤原の“ほっと”ショットコーナー(中村智子)9
- 古民家再生・整備状況について(北山郁人)10
- 野守のつぶやき①(清水英毅)11

(敬称略)

■ 1月～4月の活動報告

事務局

【1月】

- 14日 公益財団法人イオン環境財団からの助成50万円決定。用途はレンタカー費用など。
- 21日 草野塾頭(当時)刈り払い機安全講習受講、今後参加者に指導予定。
- 25日 東京楽習会として、小貝川の野焼きに参加。希望者は翌26日の菅生沼の野焼きにも参加。それぞれ約100名の参加者のうち、当塾からの参加者は小貝川8名、菅生沼4名。
- 26日 朝霧高原「茅葺体験」&第13回 乙女高原フォーラム2014に浅川幹事が参加。テーマは「テンの目に写る乙女高原の自然」
- 20日 伊勢神宮営林部と情報交換、茅場の維持手法、茅の減衰対策につき情報をいただく。

【2月】

- 3日 清水塾長ほかみなかみ町役場訪問 町長はじめまちづくり交流課(宮崎課長、林GL)、観光課(真庭課長)、商工会(山田局長)と面談。
- 5日 麗澤中学・高等学校と、樹木観察会および水上フィールドワークについての打ち合わせを実施。
- 11日 3月実施予定の雪中散策で行く大幽の下見および地元との野焼きの打ち合わせ。

【3月】

- 8日、9日 一般参加歓迎プログラム⑦「雪原散策およびキャンドルナイト」実施。39名参加。村づくり協議会連携による無料バス34名が利用。
- 14日 二重丸プロジェクト UNDB-J「国連生物多様性10年日本委員会」認定事業の連携事業に認定される。
- 18日 東洋大学佐野先生とフィールド調査の打ち合わせ。10月の茅刈に11名の計画。
- 31日 上ノ原周辺の昆虫調査をお願いしていた山崎先生から「25年昆虫リスト」を受領。

【4月】

- 1日 みなかみ町組織改革 環境課がなくなり、観光課『自然観光グループ』が新担当となる。直接の窓口は小樽 晴彦係長。
- 3日 新旧塾長が自然保護協会、森林文化協会、早稲田環境塾を訪問、交代の挨拶。
- 4日 みなかみ町観光課、区長など新旧塾長挨拶
- 19日 第13回定時総会開催。(詳細は別項参照)
- 19日 総会後にセミナー開催、テーマは「利根川の生き物を守る『人のかかわり』」(別項参照)
- 26日、27日一般参加歓迎プログラム2014年度①「野焼き」実施 開始にあたり町長、利根沼田森林管理署長、区長などの挨拶をいただく。

(以上)

■第13回「定期総会」開催報告

— 新年度活動計画・日程と特別セミナー 事務局

当塾は本年、皆さまのお陰をもちまして発足13年を迎え、去る4月19日に、東京都渋谷区の環境パートナーシップ・セミナースペースにおいて、第13回定期総会を開催いたしました。大きな節目となる総会となりました。以下、その概要をご報告します。

◆新年度の執行態勢～新任幹事・オブザーバーの紹介

本総会において、創設以来、長年塾長として青水の基盤を築いてこられた清水塾長が勇退され、新塾長に草野塾頭が就任。新塾頭には北山みなかみ事務所長が就任することとなりました。

文字通りボランティアとして献身的に当塾を率い、長年にわたり森林塾青水を大きく育てあげられた清水塾長に大きな感謝をささげるとともに、この間、活動を支えてくださった会員ならびに関係各位に厚くお礼申し上げます。清水前塾長には引き続き顧問として、青水の活動を支援いただきますが、皆様方には今後とも森林塾青水に変わらぬお力添えを賜りますようお願い申し上げます。以下、青水の顧問及び裏方を務める幹事・オブザーバーを紹介します。

顧問団：原 剛・安楽勝彦・笹岡達男・滑志田隆
清水英毅

塾長 草野 洋：全般統轄

塾頭 北山郁人*：全般統括補佐、みなかみ事務所長、古民家再生、オリ根ネット他

幹事

浅川 潔：事務局長

稲 貴夫：「茅風」編集長、東京楽習会他

岡田伊佐子：婦人部代表、自然ふれあい学習他

高野 史郎：学監、自然ふれあい学習他

増井 太樹：事業統括、流域コモンズ・草原再生ネットワーク他

古高 利男：コラボ／自然観察会「のらえもん」他

松澤 英喜：事務局長補佐、会員管理、HP他

吉野 一幸*：地元代表、オリ根ネット、古民家活用・交流促進他

米山 正寛：コラボ／森林文化協会、発信活動拡充他

監事

林部良治：会計（年会費、経理統括）

オブザーバー / 相談役

小樽 晴彦*：行政／役場窓口（観光課自然観光グループ）

林 親男*：地元／「上ノ原運営協議会」窓口（藤原案内人クラブ）

川端 英雄：株主会員代表／大目付

青字は新任役員 *印はみなかみ町在住の役員です。さらなる若返りと地元シフトを計りつつ、役割分担を明確にしました。ご志援ご指導の程お願いいたします。



◆2014年度の主な活動計画・日程

また、総会では2013年度の事業報告並びに会計収支が承認されるとともに、2014年度の事業計画並びに予算案が可決されました。主な事業計画及び行事日程は下記の通りです。参加のご案内は、行事開催日の約一カ月前を目途にお送りいたしますので、それぞれご予定の程、お願いいたします。

月	活動項目・日程
4	定例活動① 山の口開き・野焼き/26(土)、27(日)
5	・麗澤学園樹木観察会/17(土) ・茅株植栽 平日又は休日
6	・定例活動② 初夏の古道散策・自然観察交流会/21(土)、22(日)・楽習会①/28(日)(土)
7	麗澤中 オリ根水源の森フィールドワーク/4(金) ・定例活動③茅場整備・生き物調査 /26(土)、27(日)
8	・防火帯刈払い/平日又は休日
9	・定例活動④ ミズナラ林整備・生き物調査/27(土)、28(日)
10	・定例活動⑤ 茅刈/25(土)、26(日) ・楽習会②/11(土) ・茅刈平日プラン/第5週
11	・定例活動⑥ 山の口終い・茅出し/15(土)、16(日) ・利根川源流域オプションツアー/16(日)、17(月)
12	
1	・楽習会③ /24(土)又は25(日)
2	
3	・定例活動⑦ 雪原かんじき散策 /7(土)、8(日)

◆会員制度の改定

総会において会則の変更が承認され、会員制度が改定されました。本年度から一般会員制度が廃止され、正会員に一本化されました。すでにご案内の通り、従来の一般会員の皆様には、新制度のもと、正会員として5千円の年会費を申し受けたいと思います。ご理解の程よろしお願い申し上げます。会員の種別は、

正会員 5千円

家族会員 1千円

協賛会員 1口1万円

となります。

◇継続は力 —2代目塾長就任にあたって—

塾長 草野 洋

4月19日の総会において皆さまのご承認を得て2代目塾長となりました草野です。

重責ですが精一杯務めさせていただきます。

森林塾青水は2000年に発足し、以来14年にわたり茅場の再生などの環境保全活動を継続実施してきました。まさに、「継続は力」を実践するNGO団体です。

この間、会員や賛助会員の「知恵・力・資金」とボランティア精神と地球環境基金助成事業やみどりの羽根募金助成事業などの支援を受けながら実施してきた諸活動は、「自然環境功労者環境大臣表彰」「日本自然保護協会沼田賞」を受賞するなどの高い評価を得ております。



森林塾青水の発展は、創始者であり、飲水思源教の教祖と言っても過言ではない初代塾長清水さんのご尽力を原動力として此処まで来たものです。その清水さんの後任というプレッシャーに加え、果たして自分に出来るのだろうかと不安がありました。しかし、幹事の方々の「清水さんの後は誰がやっても大変なことは間違いない。みんなで分担しながらやっていけば何とかできます」との力強いお言葉と、藤原・上ノ原の茅場に今後とも係わりたいたいとの思いで引き受けました。

昨今、手入れが遅れている人工林、耕作されなくなった田畑、増え続ける野生鳥獣の被害、廃村になる集落、住まなくなって朽ち果てる古民家など、本来、人が関わって快適な状態が維持される魅力的な自然や施設の荒廃が増え続けています。

上ノ原の茅場も本来の利用や管理がされなくなったもののひとつですが、青水が野焼きなどの作業を復活して再生を目指して活動してきた結果、人と自然が織りなす風景や文化が蘇りつつあります。

価値ある茅場の再生に人が関わり、本来の姿という目標に向かって、これまでの活動を地道に継続することがこれからも大切と考えています。

茅場に必要の野焼きや茅刈りなどを利根川下流住民と地元の方々がモットーである「楽しみながら汗を流す」の協働活動を継続する、その結果が地域活性化や流域コモンズの形成という成果に繋がると考えています。

したがって、あまり大上段に振りかぶらず、上ノ原や藤原を大事に思い、利根川水源域への感謝を忘れない「飲水思源」の想いで継続していきたいと思えます。

会員の皆様には、上ノ原で手足を伸ばし、心を休める共通の場(コモンズ)として何度でも訪れていただきこれまで以上のご協力ご支援をお願い致します。

◇塾頭就任挨拶

塾頭 北山郁人

今年度より、森林塾塾頭となりました北山郁人と申します。これまで現地事務所長ということで担当させていただいておりましたが、さらに塾頭ということでお世話になります。現在、森林塾のほかに地元の地域おこしの活動をしているNPO法人利根水源地域ネットワークの事務局と地域資源を生かした体験型の旅行を企画販売



する旅行会社である一般社団法人みなかみ町体験旅行の事務局も兼務しており、これらは、すべて藤原やみなかみ町を活性化することを目的として事業をおこなっています。

都市住民が中心の森林塾と地元中心のNPOが協力し、利根川流域のネットワークを作り、本物の自然や文化、暮らしを体験できるプログラムを体験旅行で提供、販売するという流れを作りたいと思っています。また、若い人たちが、どんどん藤原に通って、地元の人たちと交流しながら地域を盛り上げ、一人でも多くの家族が藤原に定着してもらえる仕掛けを作っていきたいとも思っていますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

フェイスブックやブログが見られる方は、「そうだむさあ」で検索してください。「いいね」をしていただだけでも我々の励みになりますので、よろしくお願ひいたします。

◇セミナー報告

報告者 西村大志

利根川の生き物を守る『人のかかわり』
講師：西廣淳(東邦大学生命圏環境科学科准教授)



上の原の水が流れ下る利根川。その姿は、昔と比べて随分変わっている。インターネットで「歴史的農業環境閲覧システム」をみると、その変化がよくわかって面白い。明治時代には、流路は幾筋にも分かかれて複雑に曲がりくねり、周辺には大小様々な湿地が点在していた。つまり、洪水の影響を受ける広大な「氾濫原」があった。今ではダムができ、堤防

が整備されて、川は昔のように暴れなくなった。

洪水は氾濫原に多くの生き物たちを育んだ。それには、洪水によっていろいろな地形・水深の場所（生育環境）ができること、土壌と栄養分がもたらされることに加えて、「攪乱」の影響が深くかかわっている。例えば、洪水は大量の水や土砂で植物をなぎ倒したり、地形を変えたりしてしまう。すると、そこで新たな競争が始まり、背の高い植物の下では生長できないような種にもチャンスが生まれるのだ。そのチャンスに備える一つの戦略として、土の中で種の状態を攪乱を待っている植物たちがいる（この種の集団を「シードバンク」という）。ヨシ原ではなんと足の下だけで200~600個も種子が埋まっているというから驚きだ。植物たちが攪乱をいかに期待しているかわかる。

利根川に限らず、洪水による自然の攪乱はめっきり減ってしまったが、一方で人間による自然への働きかけ（関わり）も攪乱と捉えることができる。その関わり方の例として、茅場、水田、放棄田の三つが挙げられた。

茅場の例として、霞ヶ浦の南岸に位置する半島状の浮島湿原がある。ここは江戸時代から管理されてきた茅場で、50くらいの短冊状の区画をくじ引きで割り当てて刈り、火入れ（「やーらもし」といった）をしていた。上質な「シマガヤ」が取れる区画がアタリだったという。そして、アタリだった場所には、なぜか今、絶滅危惧種が集中的に分布している。人の都合で手を入れていたのに、なぜ？

その理由はこうだ。シマガヤはカモノハシという植物の混ざった茅で、これがアタリの場所に多く生えている。火入れによってカモノハシの生育が促進され、その株が微高地をつくる。するとそこに水分を保持するミズゴケの仲間が生育する。そうしてできた、水没せず、かつ乾燥しにくい環境が、多くの植物にとってよい発芽環境になるのだ。めぐりめぐる人と生き物の関係。生態学を学んでいて、こういう物語に出会えたときはいつも興奮してしまう。

二つ目の関わり方の例は水田だ。ほんの50年ほど前にはまだ、船で田植えを行うような水浸しの湿田が氾濫原に見られた。農地にされたとはいえ、氾濫原湿地の性質をよく残し、人間による耕起や収穫が攪乱の機能を果たしていたのだろう。湿田にはかつて氾濫原環境に依存していたであろう多くの植物が生育していた。しかし、今では乾田化や農薬の使用により水田の代替湿地としての機能は低くなり、昔は「雑草」だった水田の植物は、多くが「絶滅危惧種」となっている。どちらが不名誉な呼び方だろうか。

三つ目は放棄田である。「コウノトリ育むお米」で有名な豊岡市にある田結地区では、1990年代から2005年にかけて全ての水田が耕作中止された。普通はすぐにヨシなどの背の高い草本が生えるが、田結地区の放棄田は背の低い植物がほとんどで、明るい。それにはいくつか理由があるが、主なものとして、

一つはシカやイノシシの仕業がある。彼らが泥浴び等で利用することで、植生が攪乱されるのだ。もう一つ挙げたいのは、コウノトリのえさ場づくりや洪水軽減のために、畔や水路の維持管理が行われていることである。地域住民やNPOの活動によって、コウノトリにも、湿地生の植物にもよい環境が維持されている。

講演のまとめとして、利根川の自然再生に向けて4つのポイントを示していただいた。①過去から学ぶ…地形・生き物（文化も付け加えたい）をヒントにする、②未来に幅広い選択肢を残す…絶滅など不可逆な変化を避ける、過去に戻すだけが正解ではない、③新しい「自然とのかかわり方」を工夫する…自然攪乱の代替、④「地域」の範囲を変えて考える…流域単位の視野をもつ、の4つである。

これらはどれも、森林塾青水の活動として指針・目標としたい考えであり、同時にすでに実践し始めていることでもあると思う。例えば④の意味するところはまさに「飲水思源」、「流域コモンズ」の考え方だし、野焼きツアー等による利用は③の一つの形だといえる。そして講演の後、こうした考え、活動を、上の原でもっと深めていくために何ができるだろう、と考えさせられた。

◆東京楽習会開催報告 報告者 稲 貴夫 「小貝川の野焼きを体験する」

第2回東京楽習会を1月25日（土）に実施しました。今回の楽習会は、利根川支流の小貝川河畔（茨城県常総市）で行われている野焼きへの参加です。

小貝川の野焼きは、昨年の楽習会でお世話になった茨城県自然博物館の小幡和男先生をはじめ、植物生態学の研究者である西廣淳先生（前頁のセミナー報告参照）、津田智先生（岐阜大学準教授）が地元の「水海道自然友の会」と協力し、河畔に生育するノウルシやヒメアマナ、タチスミレなどの希少植物の保全などを目的に、十年ほど前から実施しています。

当日は常総線の水海道駅に清水塾長以下八名が集合、九時過ぎに河川敷の野焼き現場に到着。百名近いボランティアや研究者、学生など参加者と一緒に、野焼きと植生との関わりや、合わせて実施する温度測定実験などについて話を伺いました。

かつて、自然界の様々な植物は、人間社会によって様々な形で利用されていました。川原に生育するオギやヨシなども、屋根葺材や飼料、肥料として伐採されてきましたが、そうした自然生態系に対する人為的攪乱が、



日照や温度の変化によってある種の植物が発芽し生育する条件をつくり、生物の多様性が保持されてきたということです。

しかし、社会の近代化によって草原の維持にも必要な人為的攪乱が行われなくなった結果、ヒメアマナやタチスミレなどの草原に生える植物が絶滅危惧種となってしまいました。小貝川の野焼きは、そうした植物の保全や、実際に野焼きが生態系に及ぼす効果などを調査する目的をもって実施されています。

この日野焼きを実施したのは小貝川右岸の三カ所で、それぞれ草地の様子も異なりますが、三日前の降雪の影響で若干地面が湿っていたこともあり、燃え具合は例年より時間がかかったようです。ただ、三年振りに火入れをした最後の現場は、比較的良好に燃えたとのことでした。終了は予定の十一時半から午後一時に延びましたが、青水から参加の八名は、全員三カ所の野焼きが終了するまで、熊手などを使って防火帯の整備にあたりながら、小貝川における野焼きの実際を学びました。



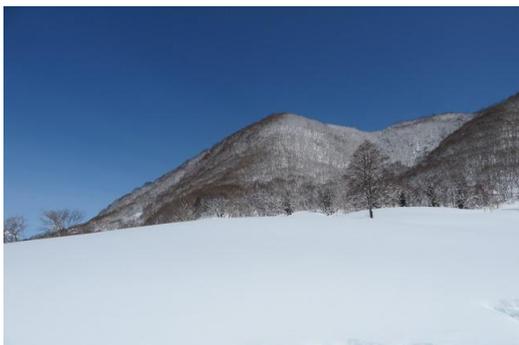
■一般参加歓迎プログラム参加者レポート —雪中散策・キャンドルナイト編—

2013年度最後のプログラムである「和かんじきで雪の草原・森林散策&かまくら・キャンドルナイト」を3月8日・9日に開催、一般参加を含む64名が参加しました。初日は藤原地域の観光イベント「かまくら&キャンドルナイト」の準備をお手伝いし、夕方からイベントに参加。2日目は、雪の草原・森林を和かんじきで歩き、藤原の自然に触れました。

◆キャンドルナイト&雪原散策に参加して 松田 そら(14歳)

バスを降りたら、目の前に広がっていたのは一面の雪景色。私は、雪のないところに住んでいるので、それだけで興奮しました。

お昼ご飯を食べて、いよいよ1日目メインのかまくら作り。キャンドル用の小さいかまくらをたくさん作りました。簡単そうに見えて、これが意外と難しい。



うまくやらないとすぐに崩れてしまいました。いくつか作るうちにコツをつかんで、後半は、うまくできました。かまくら作りがひと段落したところで、ぐんまちちゃんが来てくれました。一緒に写真を撮りました。

夜になってから、キャンドルナイトを見に行きました。キャンドルのやさしい光でまわりが照らされて、息をのむほどきれいでした。自分が作ったかまくらにもキャンドルが置かれていて、こんなきれいな景色の一部を自分が作ったのだと思ううれしくなりました。

2日目は、大幽トレッキングに参加しました。スノーシューをはいて、大幽洞窟を目指しました。スノーシューをはくのも雪山に登るのも初めてだったので、すごくわくわくしました。2メートルも積もった雪の上を歩いて行きました。林の中を歩いていると、雪から枝が生えているみたいでおもしろかったです。歩いていくうちに傾斜が急になって、最後のほうは、登るのがかなり大変でした。最後の坂を登りきれば、大幽洞窟に到着です。洞窟の中では、「氷筈」が見られました。薄暗い洞窟に氷筈がたく



さんあって、神秘的でした。

帰りは、急な坂を滑り台のように滑っていきました。そり遊びをしているみたいで楽しかったです。

このツアーで経験したことは初めてのことばかりで、とても楽しかったです。機会があれば、また参加したいです。

◆友人から突然の誘い

多屋 全子

友人から突然の誘い、「和かんじきで雪原散策?かまくらキャンドルナイト??」

何、何???

何やら面白そう!!!

興味が共通するセンスある友人からの誘いというだけでなく、これを逃したら後悔するぞ、と思い早速申込み。遠足を控えた子供の様に数日前からわくわく。友人とも持ち物チェックなどを何度もして、準備段階から楽しみました。

大きな大きなかまくらの前に、小さなかまくらを二人で20個も作り、キャンドルを灯したときに



は大満足。夜になり、会場を遠目に見たかまくらキャンドルは、自分たちがかかわったこともあり、感動もひとしお。サックスの演奏も幻想的なかまくらの灯りをバックに、寒さも忘れて聞き惚れていました。

翌日の大幽の洞窟までの雪原散策は、想像以上に気持ちよく、楽しいものでした。急な上り坂も頑張って登った甲斐があり、洞窟内の氷筍も、天井の氷の結晶？も疲れを吹っ飛ばすものでした。



そして何よりも楽しかったのは、その急坂をお尻で滑り降りたこと、新雪をスノーシューで歩き

回ったこと。子供以上にはしゃいでしまいました。

お腹ぺこぺこの私たちを待っていてくれたのは、手作りのぼた。胡桃味噌が炭火で香ばしく焼かれていて、夢中でふたつもぺろり。作ってくださった方たちにお礼をいうのもすっかり忘れていました。この場をお借りして、「ごちそうさまでした。最高のごちそうでした。」

宿泊先がバラバラだったのが少し心細かったですが、『関ヶ原』の方達は出発時間やご飯の時間、送迎のことなどお気遣い頂き、何よりも、手作りこんにやくをはじめ、お袋の味をら思わせる料理のかずかず、すべて美味しく頂きました。

内容の濃い2日間は、スタッフと地元の方達のおかげ。このような イベントなどで、藤原を多くの人にもっともっと知ってもらい、活性化することを願って止みません。

◆贅沢で貴重な経験

齋藤 寿子

3月8日、早朝に八重洲の鍛冶橋駐車場を出発。横浜の下町育ちの娘と私は、その時からワクワク・・・頭の中は「大きなかまくら」の事でいっぱいでした。大雪が降った今年の冬でも地元の街では、せいぜい雪だるまを作れるくらい。大人の背丈よりも大きいかまくら作りなんて夢のまた夢。ですが、今日はその夢を叶える事が出来る場所へ行ける。今どきの都会の子供は幸せだなあ、



などと思いつつ藤原のDVDを車内で視聴。森林塾青水の四季折々の活動が、美しい自然とともに映し出されました。人と生き物の入会地を目指す、

と云う趣旨の一連の活動は、とかく個人主義になりがちな現代の子供にとっても、大変良いことだなと改めて思いました。

バスに揺られ、気づけば藤原。少し吹雪いていましたが、宝台樹スキー場の一角には既に幾つかのかまくらが作られていました。身長180センチの夫が入ってもまだまだ余裕の高い天井。中はとても広い空間があり、娘は大喜び。生まれて初めての贅沢な経験をさせて頂きました。実際にかまくら作りも体験しましたが、先だつての都会の雪かき作業とは比べものにならない位、本当に重労働。雪国の方々の冬のご苦労を思い知りました。

この後、かまくらとその周辺に、沢山のキャンドル置き場を作り、点灯式。暖かい炎の色が創り出す幻想的な光景が、辺り一面に広がりました。加えて、サックスショーや子供向けの宝探しゲーム、フィナーレの打ち上げ花火、と盛り沢山のスケジュール。家族で幸せな一日を



いただきました。

また、翌日は朝から「ぼた作り」。これまた貴重な経験でした。くるみ割りや、その実を取り出す

作業、すり鉢を使った味噌作り。大勢で一つの作業をすることの愉しさを存分に味わいました。それから、新雪の雪原を散策。新雪の上を和かんじきで歩くと云う、またもや初めての体験。都会のもやしっ子でも難なく素早く歩くことが出来て感動。先人の知恵に脱帽しました。

いくつもの初体験をさせて頂き、本当に充実した二日間でした。森林塾青水の皆様、そして暖かく迎えて下さった藤原の皆さまに感謝致します。本当にお世話になりました。有難うございました。

◆ゆき

島貫 倫子

ここがいつもの茅原？！

白い平原は、積もりたてのふわふわに深く覆われていた。

かんじきは、賢い先人の知恵。棕櫚の縄は、天然のストッパー。がしがし歩いて、思いのほか、解けない。雪をレフ板代わりにして、草野さんが120%かつこよく見える。皆で一列になって、獣道を作る。もちろん、



先頭は、草野さん。草野さんは、汗だく。お蔭様で、後方の私たちは歩きやすかったですよ。

真っ白な布団に横たわって真っ青な空を見上げてい

る谷川岳、トチの木の冬芽のねばねば、見渡す限りをスウィートホームにしているウシ科カモシカの足跡…ん？これは…私型！

春には雪の合間に土が見え、そこに火を放つ。真っ黒になった土から、芽を出し、夏には青々とした草いきれ、秋には茅葺屋根の材料として刈られる。そしてまた、雪が積もる。

毎日、自分が飲んでいる水は、どこから来た水か。水道から蛇口をひねると出る水…、それより今は、ペットボトルに入った、どこかの産地が明記された水かな。利根川を遡っていくと、藤原の茅原に辿りつく…そんなことを聞いてから、時々みなかみに赴き数年が経ち、やっと、今年の冬をもって、四季を見ることができた。

屋根にも原っぱにも、電線にも枝にも、人にも獣にも、全てに満遍なく降り積もる白は、足搔いても太刀打ち出来ない自然で、それは心地よい諦めを与えてくれる。だからこそ、今、何が出来るのか、考える時間を、春待ち人に、与えてくれる。

まぶしい白の下には、あとどのくらいで頭を出そうか、焦ることなく、でも確実に機会を狙っている植物や動物がいる。私も、動物の一人です。

※また、みなかみに来る時には、友達を誘ってきます。



顛末です。

まず、防火帯方式での野焼きの日程設定に悩みました。去年は連休明けの5月11日に設定してたところ、異常乾燥で断念したため、今年は4月第4週をターゲットに予備日を5月第1週に設定しました。しかし、4月第4週は、機械で除雪をしていたかつての日程と同じですので融雪が進まないことが予想されました。これに対して5月第1週は自然融雪で周囲には残雪が期待できるので乾燥が激しくなければ可能性が高いと思われましたが、連休ですので人が集まるのかが課題となります。また、4月第4週では、野焼きが中止になった場合、山野草の季節には時期が早く、代替プログラムに苦勞することが明らかでした。

「お天気次第」という宙ぶらりんな状態が動いたのは3月8日の地元古老衆との協議の場でした。

事務局案の5月第1週はやはり危険との地元の意見を尊重して実施日は4月第4週と決定しました。しかし、雪解けの状態は依然として不透明でしたが参加者募集の都合を考慮して日程を決めなければなりませんでした。

しかし、その後も降雪や低温状態があつて雪解けは例年より遅く、上ノ原を調査した4月5日で、1m50cmの積雪があり、古老の、実施日には50cmの残雪があるとの推測を聞き、地元幹事の北山さんや吉野さんと対応策を話し合った結果、機械による除雪を決断し、地元協力者の支援を仰ぐことにしました。除雪は吉野純一さんが仕事の合間を見てボランティア価格で実施していただくことになりました。

今回の野焼きには、出来る限り一般市民の方に参加していただくとうと無料バスの運行を検討したところ共催団体の NPO 法人奥利根水源地域ネットワークのご協力により実現し、一般参加と「のらえもん」グループを合わせて約50名が東京からの無料バスを利用して現地入りしました。

また、今回はみなかみ町、観光協会、商工会、森林文化協会から後援を頂きました。

スタッフ3名が前日から現地入りし、除雪状況を確認したところ、大まかに4か所に区分できる比較的広範囲で焼ける状態を確認しました。ただ、予想通り、周囲は残雪が多く、ミズナラ林に入ることもできず山野草も見当たらないので翌日散策をどうするかを、林親男さんと相談した結果、雨呼山と藤原集落内を散策することにしま

■一般参加歓迎プログラム2014① —春の風物詩「茅場の野焼き」編—

2014年度最初の一般参加プログラムの「茅場の野焼き」を、4月26日・27日、青水の本拠地である藤原「上の原」で開催しました。これまで諸事情により二年続けて野焼きは実施できませんでしたが、予定日の26日は天気にも恵まれ、一般参加を含む約70名が、4班に分かれて野焼き作業に従事し、それぞれが気持ちよく汗をかきました。草野塾長と参加者のレポートをお届けします。

◆3年ぶりの野焼きを実施 塾長・草野 洋 —2014年度の野焼き顛末記—

茅場を良好な状態に維持するために大切な行為である野焼きは、一昨年、昨年と2年続きで休止せざるを得ませんでした。自然条件に左右される作業ですので思い通りにはなりません、今年こそはやらなければとの想いで取り組んだ今年の野焼きが若干の問題は生じたものの無事終わって安堵しています。以下野焼きの



した。

当日は晴天で、絶好の野焼き日和。バスで到着した参加者、地元古老、みなかみ町役場、利根沼田森林管理署の方々を含めて総勢82名が上ノ原に参集しました。

北山塾頭の仕切りで、始まりの式、山の口開け神事を行った後、参加者は4班に分かれ持ち場を確認しながら除伐を行いました。

野焼き講習会で野焼きのやり方を学んだあと、4か所で火の手が上がったのは14:40分頃。

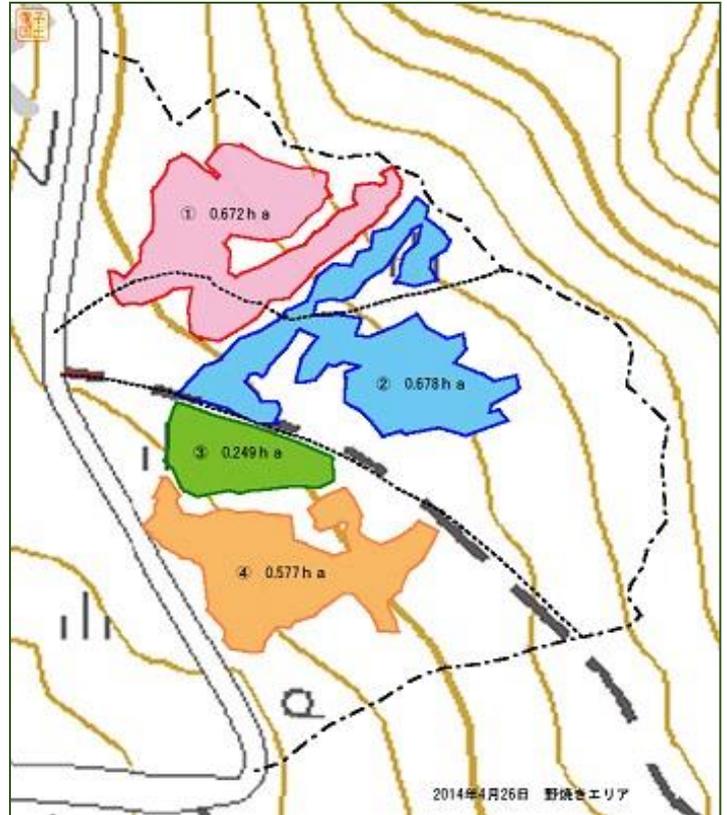
雪で倒伏したススキは少し湿り気を含んで燃え方は比較のおとなしく、安心して見ていられる状態でした。それでも、ときどき大きく立ちあがる炎にたじろぐ場面や、パチパチと激しくはじけるススキ、立ちこめる煙、白い雪間に黒々した焼け跡が広がっていく様子は圧巻でした。今回は消火・延焼防止、残火処理にジェットシューターが活躍しました。

野焼き面積は北山さんがGPSで計測したところ2ha弱でした。(右図参照)

とにかく無事終了、2年分の想いをこめて広範囲に良い野焼きができました。鎮火を確認したのが16時30分。野焼き終了を見図って、地元のご婦人方のゑみ子さん、フミ子さん、智子さんからおやきなどの美味しい郷土料理の差し入れがありました。

その夜、恒例の交流会での参加者の感想を聞いて、やはりやってよかったと感じた野焼きでした。

翌日は好天の中、雨呼山、諏訪神社、一畝田集落の散策により藤原集落の風景・自然・文化に触れたプログ



野焼きのエリア(作成:北山郁人)

ラムで心地よく疲れたあと、上ノ原で焼きおにぎりの昼食で全日程を終了しました。

今回の野焼きもみなかみ町をはじめ多くの方にご協力いただきました。地元の方々、商工課、観光協会、森林管理署、そして遠くから駆け付けていただいた西廣先生、津田先生、小幡さん、本当にありがとうございました。

最後に、今年の野焼きの反省点です。

それは、野焼きにおいて地元の水道施設のパイプ等に損害を与えたことです。幸いに北山さんに対応頂いたところ寛大な御心でとりあえずご理解いただいております。次回から事前の見回りで除外箇所を徹底しなければなりません。

また、実施日の問題はこれからも悩みの種で、機械による除雪を続けるには経費を含め限界があります。参加者の募集と係わる防火帯方式による野焼きを安全にやる期日を今後も模索することになります。

◆野焼きに参加して

井本 大貴

早稲田大学社会科学部4年の井本大貴です。

4月26~27日の野焼きで、初めてみなかみを訪れました。野焼きや、上ノ原の清流を飲むという体験を通じて、パワーをもらって東京に帰ってきました。

私が「森」というキーワードに関心を持ったのは、高校2年生からでした。「聞き書き甲子園」というイベントに応募をしたことがきっかけで、北海道の檜山郡にいる太鼓づくりの名人のもとに2回通って、名人の生い立ちや太鼓づくりに関しての聞き書き取材を行いました。



そして、「聞き書き甲子園」が終わってからも、その卒業生を中心に、年に数回、千葉縣市原市の「鶴舞創造の森」に通って活動を行っています。

地元の方や、グリーンセイバーの資格を持っている人のアドバイスを受けながら、下草刈りや、手すりの補修といった作業・植物の観察会といった作業を中心に行っています。活動のあとは心地よい筋肉の疲労とともに、前日の二日酔いなども吹き飛んでいきます。(笑)

上ノ原を訪れたとき、つい鶴舞の森との違いを考えたように思います。

思いつくのが、上ノ原のごみの少なさです。また、地元の方がガイド役となって地域の歴史など話してくれたことに驚きを感じました。

地元の方のお話では、手桶で水を汲んでお風呂の水を用意していたお話など伺うことが恵きました。次回は、手桶などのキーワードを頼りに、みなかみの歴史や産業について学べたらいいなと思っています。飲水思源という言葉を初めて聞きましたが、水源地域として、環境への意識がとても高いのかなと感じました。鶴舞創造の森では、今年の10月11~13日で、外部の人(主に学生)を対象にした、大規模なセミナーを開く予定です。もし森の整備活動などに興味がある方がいらしたら、その場でもご縁をいただけたらと思います。

◆かまくら作りも野焼きも、両方楽しみました 南野ショナー

森林塾青水を知ったのは、3月のかまくら作りとキャンプドルナイト&スノーシュートレッキングの新聞広告です。子供の頃からあこがれていた「かまくら作り」に惹かれ参加させて頂き、期待以上の楽しさでした。その時ご案内いただいた「野焼き」も見逃せない！と思い、連続で2回目の参加となりました。

土曜の朝7時に東京駅近くに集合、「のらえもん」と2台のバスに分乗して水上に出発！天候も上々で渋滞も少なく予定より早く到着。水上ICの辺りでは予期せぬ満開の桜が出迎えてくれました。上の原に着くとお弁当タイム。子供達は残雪でそり遊びに夢中でした。

そして午後1時、いよいよ野焼きの開始です。と言っても、いきなり火をつけるのではなく、各自鎌やのこぎりを持って担当のエリアに行き、ところどころに生えている小

さな木々の枝などを刈り取る除伐をおこないます。その後ようやく火入れです。これは経験者の方々の



役目で、子ども達や未経験者は遠くから見守ります。山火事にならないよう、予め雪で防火帯をつくっておくこと、火は斜面の上からつけることなど、そして野焼きが美しい草原の維持にかかせないことなど初めて知りました。雪でススキは湿ってしまっていたので「それほど燃えないだろう」と思っていたのですが、炎はあっという間に広がり、

バチバチと燃える様は圧巻でした。過去2年間、条件が整わず野焼きができなかったとのことで、初めての参加で



見ることができたのは本当にラッキーだと思います。最後には地元の方が、露の臺入りの美味しい「おやき」を差し入れてくださいました。

翌日は雨呼山のトレッキングと諏訪神社の見学、森林塾青水で取組まれている古民家の再生現場など見せて頂きました。途中、土筆や露の臺、ヨモギなどがたくさん自生しており、私を含め何人かの参加者は道草に忙しかったのですが・・・また、福寿草をはじめ街ではほとんど見る事の出来ない、野草の可憐な花もたくさん咲いていました。



ていました。

最後は再び上の原で、焼きおにぎりや、ごみのクルマ味噌あえ等、山のご馳走をいただき

て、おいしい湧き水でお抹茶をいただきました。2日間大満足の内容でした。

色々ご準備いただいた事務局の皆様、みなかみ町の関係者の皆様、本当に楽しく過ごさせて頂きました。ありがとうございました。

■ 藤原の”ほっと”ショットコーナー
— 野焼き 番外編 — 中村 智子

毎号、「藤原の”ほっと”ショットコーナー」を連載いただいている中村智子さんより、「可愛い”野焼きの写真を送りいただきました。野焼き“番外編”としてご覧ください。



■古民家再生・整備状況について

北山 郁人

2年越しの古民家再生もやっと先が見えてきました。結局床は全て剥がし、基礎部分もコンクリートでしっかり固めました。



その上に、新しい材料で床を張り、大開口のサッシも入りました。皆様のご協力により、当初から見れば見違えるようになりました。



■野守のつぶやき①～勝手に「野守」宣言

清水 英毅

○**標を渡すまでの道のり** 塾の執行部若返りの具体化を図り始めたのは4～5年前のこと。丁度、10周年を迎えようとする前後のことだった。NGOのトップとしての塾長職に定年があるわけではないが、自分も元気で塾



の活動も活発なうちに意中の人にバトンタッチしたかったのだ。周到に準備していたつもりだったが、なかなか根気と時間を要する難事だった。

塾の発足以来、①参加者全員に楽しみながら良い汗をかいてもらう ②地元ならびに町役場との協働 ③活動の中核人材の確保と適正役割分担 ④将来にわたって活動を維持しつつ外部からの評価と期待に応えていくこと、などに意を用いてきた。自分自身も楽しみながらやっているうちに、関係各位のご理解ご支援のお陰をもって、ここまでは何とか課題をクリアしてきた。しかし、最後の課題＝⑤執行部の若返りは想像以上に難儀した。今更ながら、NGOトップには定年もないが人事権もないことに気が付いた。幹部諸兄の賛同を得ても、肝心のご本人がその気になり諸々の環境が熟さないとバトンは宙に浮いて落ちてしまう。でも、辛抱強く機が熟するのを待ちこの程、2代目塾長を草野さんに3代目塾頭を北山さんにお引き受けいただく運びとなった。塾長と塾頭コンビの平均年齢は一挙に15歳ほど若返った。しかも塾長は流域市民、塾頭は地元住民という理想的組み合わせ。眼の色の黒いうちに何とか間に合った、これで、安心して次の10年を託すことができるというもの。

○育んできた夢 ～「野守」願望

塾長職を引き継いだら一会員としてやりたいと思っていたこと。3～4年前から育んできた夢、それは上ノ原の「野守」になることだった。四季折々、好きな時に出かけて行って草花や昆虫たちとの出会い語らいを心ゆくまで楽しみたい。そして、一人でも出来るゴミ拾いやニセアカシアなど外来種退治、木馬道や管理道の普請などで心地よい汗をかきたい。林内を縦横に走っていたという木馬道、その奥はどうなっているのだろうか。きっと、昔々の炭窯の跡もあるはずだ。時には「水守」になって、十郎太沢の水汲み場や水槽メンテナンスのお手伝いのかたわら、源流遡行や天音の滝で身を清めたりもしてみたい！それに、十二様や草木塔、水守の像のお参りやお世話も忘れてはいけない。などなど、夢はつきない。ところで、そもそも「野守」や「水守」って何？

○「野守」の起源・歴史 ～「野守」学習ノートから

茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

額田王の詠歌。「野守」は既に、万葉の時代に存在していたらしい。鷲谷いずみ「さとやまー生物多様性と生態系模様」の中で、著者は以下のように語っている。『紫野』は、古代には貴重であった紫色の染料の原料であるムラサキが生える野のこと。その根から染料を採ることができました。7世紀初頭、推古天皇の時代に聖徳太子が定めた冠位十二階は、朝廷における身分制度で位ごとに身に着ける冠の色を定めていましたが、紫はもっとも位の高い人がつける色でした。(中略)ここで、一般の人の立ち入りを禁じた『紫野』に『野守』という番人がいたということに興味をわきます。番人は、当時きわめて貴重であった紫色の染料を採るムラサキが盗まれないように監視するのが役割だったのでしょか。この野守は、盗掘の監視だけではなく、火入れによる野の管理などの仕事もしていたのではないかと・・・と。

時代は下って中世。盛本昌弘「草と木が語る中世」に以下の記述がある。「中世のみでなく近世以降でも他領や他村から山への侵犯や伐採行為が問題になり、一般に山論と呼ばれた。山の場合は境界が不明確であることが多く、その境界の位置を巡って山論が起きることも多い。また、野においても同様に相論(野論)が発生する。こうした山野への侵入を防ぐために、山野の見廻りを行い、侵入者を見つけ次第に彼らが持っている道具を差し押さえた上で、追放することがよく行われていた。また、後述するように、山守・野守などと呼ばれる役職が置かれ、山野の見廻りを行っていた」。

○勝手に「野守」宣言 以上、学習ノートの抜粋。どうやら「野守」は貴族や領主の命を受けて野原の管理を



していたらしい。上ノ原は町有地にして、昆虫等保護条例の指定地。当塾は町役場から、その管理を委託されている。従

って、森林塾青水こそ、現代版「野守」というべき存在であろう。小生は、頼まれてもいないのに好き勝手にやるのだから責任も権限もない。自称「野守」にできる事は、これまで育んできた夢の範囲内のこと。上ノ原に入り会う人も生き物も笑顔でお付き合いしたい。やがて、先住の生き物たちから「コモンズ村・上ノ原」村民として認知してもらえる日が来ることを楽しみに……。上の挿絵(風間先生筆)、実は「野守」の後ろ姿！ (青)

～編集後記～

新年度、そして新体制発足最初の「茅風通信」をお届けします。三年振りに野焼きが実施された「上ノ原」。秋の茅刈りが待ち遠しく感じます。藤原と流域とを結ぶ通信を目指します。次号もご期待ください。(編集子)